



どうして菜食をするのでしょうか？

「どのような形でも暴力は悪であり、罪のない動物を殺すのは見るに絶えない残忍な行為です」 バガヴァンは、単に味覚を満足させるだけのために行う人間の非人間的な行為について、そのようにおっしゃっています。カリの時代の影響が頂点に達したとき、人はその真の姿を忘れてしまい、獣のような行動に陥り、肉食に走ります。Sis.マルシーニ シェラットさんは、味覚を満足させる為に人間の昼食や夕食の皿を飾る運命になった動物たちの苦痛に焦点を当てています。

「実際、植物にも動物たちと同じように命があります。しかし、動物は心を持っており、神経機能も持ち合わせていますが、植物にはそれらは備わっていません。動物は殺される時、叫び、泣きます」

(Sri Sathya Sai Baba in 'The Avatar of Love'より)

サティヤ サイ ババは、一つだけではなく数多くの理由から、私たちに菜食をするように強く勧めておられます。しかし、この記事では、人々が食する動物の苦しみに関する事柄を取り上げたいと思います。そこには残忍さが関わっています。これ一つを取ってみても、私たちが節制するのに十分な理由です。

スワミはおっしゃっています。

「動物を殺す時、あなたは動物に苦しみと痛みと害を与えます。神はすべての生き物の中に存在しています… どのようにして、あなたはそのような痛みを与えることが出来るのでしょうか？ もし、誰かが犬を叩けば、犬は大きな痛みを感じます。そうであれば、殺す時にはどれほど大きな痛みを与えることでしょ

う？」

(ジョン ヒスロップ著『サティヤ サイ ババとの対話』より)



他のすべての生き物と同じように、飼育している動物は、人間とまったく同じようなあらゆる感覚を持ち、大きな苦痛を感じる能力を持っていることを私たちは知っています。例えば、雌牛は外見は穏やかに見えますが、大変感情的な動物です。雌牛は、子牛が生後わずか数日で自分から引き離される時、本当に苦痛を感じます。雌牛たちには生涯を通じた親友たちがいます。そして、その親友たちを正しく扱わなかった他の牛や人間たちに、一生恨みを持ち続けることもあります。豚は知能が高く、繊細で、愛情深いことでよく知られています。また容易にしつけることが出来ます。映画に出てきた愛らしい「ベイブ」を覚えているでしょう？ 信じ難いという人々もいますが、羊やヤギや鶏や七面鳥も、同じように興味深い生き物です。

魚でさえ、痛みを感知する器官と、人間とよく似た神経組織を持っています。以前、魚は痛みを感じないと信じられていましたが、今では、魚が深い水の中から引き上げられ、死ぬまで大気中に放置されることにより、耐えられないほどの苦痛を感じるということがわかっています。マグロに関しては、イルカに優しい漁業というのは100%信じられるものではないということを覚えておいて下さい。なぜなら、マグロ漁のせいで、今でもイルカたち、特に赤ちゃんイルカたちが大量に死んでいるからです。その理由は、普通、魚の網にかかるのは赤ちゃんイルカたちであり、それを知った母親イルカたちが、

子どもたちのいる網の中に入って行くからです。漁師たちは、子どもたちに歌う母親イルカの声が聞こえると言います。そして、母も子もゆっくりと死んでいくのです。

工場畜産そのものが、動物たちに十分な苦痛を与えます。そして、その内に起こる屠殺場における残酷な動物たちの死は、説明するだけでも恐ろしく、心が痛みます。人が動物を食べている以上、その人は動物の苦痛の原因の手助けをしているのです。ですから、このカルマの何らかの責任を負わなければなりません。

「肉食のことを取り上げてみましょう。あなた方が肉食であるために、多くの人が動物たちを殺さなければなりません。これらの動物たちの死は、あなた方に責任があります。あなた方が動物たちを食べるせいで、動物たちは殺されるのです。これは罪です。罪のない動物たちを殺して食べるとは、何という罪でしょう」
(1995年11月21日、サティヤサイババ様の御講話より)

Is man a slave to his taste buds?



“...What a sin to kill innocent animals and eat them...” - Baba



生まれた時から肉食が食生活の一部となって育てられた人々にとって、肉食を止めることが困難なことは理解できます。そういう人々のためには、皿の上に乗っている肉は、少し前まで差し迫った死から逃れようと必死にもがき、死へと到達する旅の苦痛を感じて、おびえ、のたうっていた、感覚のある生き物であったことを思い出すことが助けになるかもしれません。人は、

習慣的に何らかの肉を食べている限り、この現状に気づくのが鈍くなるのです。また、動物は私たちの感情と全く同じように感じているということを思い出すことも助けになるでしょう。ハレクリシュナ協会のサハーデーヴァ・ダーサ博士の著書『キル カウ（牛を殺せ）』に、次のような実話が載っています。

オーストラリアのある刑務所で瞑想を教えていた仏教の僧は、ある時、暴力的な過去を持つ、恐ろしい外観の服役囚が瞑想を習いに来たことに驚きました。その服役囚は、その場に一番似つかわしくない生徒でした。にもかかわらず、服役囚の人生は完全に変わってしまったのです。その服役囚は、以前、刑務所の屠殺場で働き、毎日多くの牛や羊や豚を殺していました。

これらの動物たちは、自分たちなりに泣き、悲しみ、叫んだものでした。そして、屠殺場に着いた瞬間から、必死に逃げようとしたものでした。動物たちは何が起ろうとしているかを知っており、恐怖と不安でじっとしていません。静かにさせるのが困難です。しかし、ある日、一頭の牛が目的があるかのようにゆっくりと歩き、逃げようともせず、頭を下げて、自分から屠殺場の方へ歩いて行きました。その牛は静かにたたずみ、首を持ち上げて、動きもせずに屠殺人を見つめていました。屠殺人は全く気にせず、見つめ返しました。何も出来ずに…

牛の眼差しは揺れ動くことはありませんでした。そして、屠殺人が牛を見返すと、牛の左目には涙がたまっていることに気がつきました。さらに涙がわき出すと、涙はあふれ、牛の頬を流れ落ち、輝く涙の流れを作りました。そして、屠殺人はその牛の右目にも同じことが起こり、涙がこぼれ落ちているのに気がつきました。その牛は泣いていたのです。屠殺人は泣き崩れ、自分自身も号泣していました。屠殺人はその牛を殺すことが出来ませんでした。そして、その後の出来事をかい摘んでお話しすると、屠殺人はそれ以来、肉食主義者になったのです。牛の涙が、彼の人生を完全に変えたのです。

サティヤ サイ ババはおっしゃいます。

「命のあるものは何であれ、生きようと努力します。何であれ生きている生き物は、他の生き物の食べ物になるために自分を犠牲にはしません。動物も、鳥も、魚も、人間と全く同じように生きたいと望んでいます。私たちが捕ら

えられ、殺される危機に瀕した時と同じように、動物たちもまた、もがき、叫び、傷つけば痛みを感じるのです。ただ一つ違うことは、動物たちは自分の感じている苦しみを言葉で表現できないということです。殺されようとしている豚が、人間が叫ぶのと同じように叫ぶという報告が記録されています」

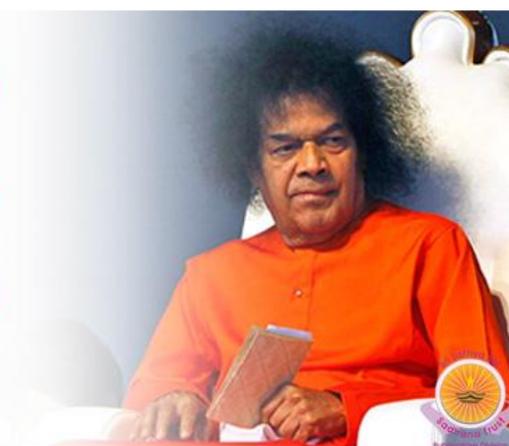
(1996年 Summer Showers)

結論として：

「どのような形であれ、暴力は悪です。そして、罪の無い動物を殺すことは見るに耐えない残虐な行為です」

(1994年11月24日、サティヤ サイ ババ様の御講話より)

**Violence in any form is evil
and to kill innocent animals
is tantamount to blatant
savagery. - Baba**



サマスタ ローカー スキノー バヴァントウ
すべての世界のすべてのものが幸せでありますように

プラシャーンティレポーター 2013年3月16日より

<http://theprasanthireporter.org/2013/03/why-be-vegetarians/>